

## 沖縄の不条理 訴え続け

写真上は「米軍普天間飛行場移設問題めぐる会合で、安倍晋三首相らと会談する沖縄県の翁長雄志知事＝首相官邸で」（中日新聞 8 月 10 日朝刊「特報」）。下は「沖縄全戦没者追悼式で、献花に向かう安倍首相を見つめる沖縄県の翁長雄志知事＝6 月 23 日、沖縄県糸満市の平和記念公園で」（東京新聞 8 月 9 日）。

中日新聞「特報」から、沖縄の不条理を訴え続けた翁長発言を振り返りたい。



2002 年 6 月に、沖縄戦の組織的戦闘が終わったとされる「慰霊の日」を前に、「本土の人は自分の所で『有事』が起きるとは考えていない。米軍基地のある沖縄は違う」と語った。



05 年 11 月には政府が、移設海域を埋め立てる許可権限を知事から国に移す特別立法を検討していることに対し、「こういう（強引な）手法は百年先まで県民意識に禍根を残す」と厳しく批判。翌月には辺野古移設について「県民の理解は得られない」として、普天間飛行場の硫黄島への移設を独自提案した。

13 年 12 月に仲井真前知事が辺野古移設に向けた埋め立てを承認すると、「今後百年は置かれ続ける基地建設への加担だ」と批判した。14 年 9 月に辺野古移設反対を公約として、知事選出馬を表明。11 月、仲井真氏らを大差で破り初当選した際には「沖縄の新しい歴史の一ページを開いた」と語った。

その後の翁長氏は、辺野古移設を巡る安倍首相ら政府側と壮絶な闘いを繰り広げた。政府批判の言葉は激しさを増した。

「上から目線の言葉を使えば使うほど、県民の心は離れ、怒りは増幅していく」（15 年 4 月、菅官房長官との初対談で）

「辺野古海域の埋め立てを強行すれば、人類共通の財産を地球上から消失させた壮大な愚行として語り継がれないか危惧している」（16 年 4 月、国地方係争処理委員会で）

最後に公の場で語ったのは先月 27 日、埋め立て承認撤回方針を表明した記者会見だった。

「朝鮮半島の非核化と緊張緩和への努力が続けられている。（日本政府は）平和を求める大きな流れから取り残されているのではないか」

翁長氏の政治的スタンスについて、「保守の正道」と捉える人もいる。思想家の内田樹さんだ。

真の保守は自国の国土や国民を守ろうとするもの。しかし、現在の「保守」は単なる対米追従にしか見えない。「保守のあるべき姿を見せてくれたおかげで、今の自民党政権がいかによがんだ保守かが際立った」と内田氏は言う。

(2018 年 8 月 21 日)